

# 日本語学習者の母語を取り入れた落語の活動報告

## －「中国語落語の会」でみんな笑っちゃイナ－

福重一成\*  
kazunari\_zai\_nanjing2011@hotmail.co.jp

### <目次>

- |                               |                                |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 1. はじめに                       |                                |
| 2. 中国語落語の会について                | 3.2 アンケートの結果から見た「中国語落語」の観客への効果 |
| 3. 中国語落語の会の効果                 |                                |
| 3.1 インタビューから見た「中国語落語の会」の演者の効果 | 4. 結び                          |

主題語: 中国語落語(Rakugo performance in Chinese)、日本語学習者(JFL Learners)、学習意欲(Motivation for learning)、教育活動(Educational activities)、日本語教育(Japanese Teaching)

## 1. はじめに

日本の伝統芸能である落語(1)を日本語学習や教育に取り入れ論じた研究や実践報告は多く見られるが、日本語学習者に母語を介して落語に触れさせ、その効果を挙げている研究や実践活動に関する報告はまだ見られない。

筆者は、日本語課外教室の活動として、「中国語落語の会」を企画し、2018年1月に行った。その活動に参加した演者である中国語圏の学生へのインタビューと、観客である中国語圏の学生・日本人学生を対象としたアンケート調査を行った。本稿ではそのインタビューとアンケートの結果を踏まえ考察し、「中国語落語の会」を通してどのような効果が得られたかについて明らかにする。

\* 日本経済大学 教育学科 専任講師

1) 江戸時代の日本で成立し、現在まで傳承されている伝統話芸の一種。本発表で扱う「中国語落語」は、発表者考案で落語を中国語で行うというものであり、中国の「単口相声 dan kou xiang sheng」ではない。

## 2. 中国語落語の会について

筆者(以下、「指導者」とする)は、2017年9月に日本語教育の新たな課外活動で国際交流の一環として、「中国語落語の会」を計画し、留学生に演者としての参加を募り、3名の希望者が集まった。その3名(以下、「学生A」「学生B」「学生C」とする)のうち、学生Aと学生BはN1レベル相当の日本語能力を有し、学生CはN2合格者であった。森(2012)は、落語の演目の台本に含まれる文型、文法を初・中・上級レベルに分類し、既習の復習を兼ねながらレベルに合った文型、文法を無理なく学習できるテキストとして有効であると述べているように、指導者が学習者のレベルをしっかりと把握し、それぞれのレベルに合わせた台本作りの翻訳指導を行った。また、演目の一つとして韓国人留学生が指導者と日本語で漫才を行ったが、本稿は中国落語の活動報告であるため、今回は触れないことにする。

落語の会の発表までの活動は、『アマチュア落語に挑戦する本! 独学なのに3ヶ月で1席できます』<sup>2)</sup>を参考に、指導者と演者の学生達とで時間を調整し、<資料1>のように行われた。

### <資料1> 中国語落語の会の流れ

	週 1 回(90分程度)の内容
2017年9月	第三週目：出演者の募集 第四週目：落語の基礎知識講座①落語の歴史と種類
10月(一ヶ月目)	第一週目：落語の基礎知識講座②落語の流れ(まくら-メイン-サゲ) 第二週目：発表演題、高座名の決定・演題の映像を探す 第三週目：台本作成(中国語訳) 第四週目：台本作成(中国語訳)
11月(二ヶ月目)	第一週目：台本を見ながら話す 第二週目：「間」の練習 第三週目：「上下」を切る練習 第四週目：「仕草」の練習
12月(三ヶ月目)	第一週目：台本を暗記する 第二週目：台本なしで「上下」「仕草」も入れて演じる 第三週目：個別対応 第四週目：着物を着て、「まくら」も入れてリハーサルをする
2018年1月	1月10日「中国語落語の会」上演

2) 室岡ヨシミコ(2016)『アマチュア落語に挑戦する本! 独学なのに3ヶ月で1席できます』言視舎

演目の選択と台詞の翻訳については、『楽しく演じる落語 教室でちよいと一席』<sup>3)</sup>やネットの動画などを参考にし、演者である学生のアレンジを加えながら作成した。導入部分である「まくら」<sup>4)</sup>は、内容が演目の本題とつながるよう、各演者が工夫した。例えば、学生Aは導入部分を高座名の「自己紹介」にした。

<資料2> 学生A「ろくろ首」<sup>5)</sup>導入から本題に入る部分

A：吼隨便啦你很囉唆耶(面倒くさいな~あんだ)  
B：你這個人…唉算了就那樣吧(この…まあその名前にするか)  
…因此就這麼決定了。在以前也是有著不好好聽人說話的人呢。  
(つてな感じで決めました。今も昔も、ちゃんと人の話を聞いてくれない人がいるようでして。)

<資料2>のように、導入部分は本題の内容と関係があり、観客が自然に本題に入れるよう引きつけるための非常に重要な部分である。演者である学生は、台詞をただ覚えるだけでなく、演目がどのような内容であるかを理解し、全体の流れを工夫する必要がある。また、台詞の笑いの部分は、中国語圏の学生が面白いと感じるよう、指導者と演者で修正や確認を繰り返した。学生Bの「皿屋敷」<sup>6)</sup>という演目の「サゲ(落ち)」<sup>7)</sup>部分を資料3で紹介する。

<資料3> 学生B「皿屋敷」サゲ部分

菊：哎呀闹着玩儿的。明天有约了、对不起了各位、今天数两天的份儿、明天休息!有约会。16、17、18!拜拜!  
(もう、冗談ですよ。皆さんすみません。実は明日デートがあるので、今夜は、今日と明日の二日分数えているんですよ。では、16枚、17枚、18枚!おしまい!)

幽霊のお菊が(普段は1枚から9枚まで数えるが)18枚まで数えたあとに、「おしまい(枚)」と

3) 桂文我(2007)『楽しく演じる落語 教室でちよいと一席』いかだ社  
4) 噺の導入部。決まり文句の他、フリートークなどで盛り上げてから噺に入る噺家もいれば、本編に関連した小噺をしゃべる噺家もいる。  
5) 物を吊るし上げる滑車を指す「ろくろ」のように宙高く伸びた形から名がついた妖怪の話。落語の噺としては、幕末から大阪で演じられていたと言われている。  
6) 井戸に身投げし死んだ「お菊」という幽霊の話。落語としての口演記録は古い(1804-)。  
7) 本題の最後に洒落や語呂合わせ、機転の利いた言葉で締めくくることが指す。

いうダジャレを含んだ台詞があるが、日本語の「おしまい」は中国語で“結束 jie shu”、日本語の助数詞「～枚」は中国語(量詞)の場合“～盘 pan”“～个 ge”となり、直訳しては、サゲにならないので、“18 shi ba”の“8ba”と、“拜拜 bai bai”のメール表記である“88 ba ba”をかけた。「幽霊のお菊がデートをする」という発想も、学生から生まれた斬新なアイデアである。本来の落語の話の流れは変えず、中国語圏の学生である観客が面白さを感じるようアレンジを加えて行く作業が、日本と中国、日本語と中国語の違いに気づき、それらについて考える非常に良い機会となったのは確かだ。

演者同士で台本や演技の細かな点の確認、リハーサルを行う等、森(2017)が述べた協働のプロセス・互恵性につながる作業<sup>8)</sup>も「中国語落語の会」の活動を通して多くみられた。

その他、落語の会の宣伝(学内の学生への声かけ、学内の広報課や学外のメディアへの宣伝協力のお願ひ)、広報用パンフレット作成(写真撮影、日本語・中国語版データ作成)、着物店との連絡(着物選び、レンタル)、会場設営、当日使用する小道具の購入等を指導者と演者、学内外の協力者が分担して行った。

プロの噺家が海外公演で中国語を使用し落語を演じることや、教育機関にプロの噺家を招き、中国語を使用して落語を披露したという事例はあるが、日本語教育の一環として教育機関で学習者が自身の母語である中国語を使用した落語の活動は、全国でも初の試みであろう。鹿児島県のテレビ局が取材に訪れ、ニュース番組で取り上げられたことや、英語落語の活動を行っている学校関係者から連絡があったことから、話題性があったことがうかがえる。<資料4>で当日のタイムスケジュールを紹介する。

<資料4> 中国語落語の会1/10(水)当日タイムスケジュール

	内容	台詞・登壇時音楽
17:50	お客様の入場開始 ※学生SAやボランティア学生が誘導	
18:00	大学の教職員による開演の挨拶と会の紹介	音楽：江戸落語の出囃子
18:10	①「ろくろ首」 肉肉亭 しんご(にくにくてい・しんご)	紹介：「土佐弁を操るトークの天才マッチョマン、<高座名>です」 出囃子：I Won't Stop

8) 森(2017)「学習者全体で小噺作品を作り上げる行為だけでなく、小噺に出現する文法や表現を学習する行為、よいパフォーマンスができるようにという目的のもとにお互いがかかわり合い、学習者間の社会的関係づくりに役立っている。」

18:20	②漫才(日本語) 春権家 紅(はりけんや・くれない) (韓国人留学生)	紹介:「笑いの神を愛し愛された韓流スター、<高座名>です」 出囃子: Smoke On The Water
18:30	休憩	
18:40	③「皿屋敷」 老王家 豆豆(ろうおうや・とうとう)	紹介:「可愛くて、可愛くて、可愛いかもしれない、<高座名>です」 出囃子: Bitva extrasensov
18:50	④「酢豆腐」 くるくる亭 巻毛(くるくるてい・まきげ)	紹介:「見た目も歌声もイケメンのエンターテイナー、<高座名>です」 出囃子: Vocalise
19:00	大学の教職員による閉演の挨拶	
19:10	閉演後、観客にアンケート用紙配布、写真撮影等	

### 3. 「中国語落語の会」の効果

「中国語落語の会」終了後、演者である学生にインタビューを行い、観客である中国語圏の学生と日本人学生にアンケートを行った。

インタビューとアンケートの結果を踏まえ考察し、①演者である中国語圏の学生が母語を介した落語を約半年間練習し、落語の発表を経験して得られた効果、②演者である中国語圏の学生と、観客である中国語圏の学生・日本人学生の間で働く対人的交互作用<sup>9)</sup>による効果について言及する。

#### 3.1 インタビューから見た「中国語落語の会」の演者への効果

「中国語落語の会」の演者の学生3名をインタビューの対象とし、以下の点に触れながら行った。

指導者: 「中国語落語の会」に参加したことで、

- ① 日本語学習として役立った点はあるか。どう役立ったか
- ② ボディーランゲージ<sup>10)</sup>や表情など、学んだ点はあるか

9) 落語における交互作用の一つで、落語と観客との間で交わされる笑いや言葉により生じる作用。

10) body language. 肉体の動作を利用した非言語コミュニケーションの一つ。

- ③ 翻訳をしてみて、どのように感じたか
- ④ 落語に対する理解、関心が以前と比べどのように変化したか

①②は日本語能力の言語的・非言語的部分の向上について、③は翻訳能力の向上、関心について、④は日本文化としての落語に対する理解、関心について知るための問いである。以下の(1)～(16)は、インタビュー時の演者である学生からの回答である。

- (1) 初めて聞いた時にびっくりしました、落語はそういう形なんだと思いました。(学生A)
- (2) 中国語で演じることは僕にとりましてはとても斬新です。(学生A)
- (3) 皿屋敷の話の歴史なども理解でき、勉強になりました。(学生B)
- (4) 落語は中国の単口漫才みたいで、実に体験したら落語のほうが難しいと思います。一人が二人、また数人が同時に話している場面を表して、そしてみんなに正確に伝えることは落語で一番大変なところで、たくさん練習しないと絶対うまくできないと思います。(学生B)
- (5) 日本文化の魅力や伝統文化を知るだけでなく、…(インタビューでは、以下(16)に続く)(学生C)

(1)～(5)から、落語を通じ、驚きや自国との違いに気づき、文化・歴史への理解が深まるという効果がみられた。

- (6) どうやって中国語を使って、お客様にネタを知ってもらえば、面白く感じるのかをかなり工夫しなければなりません。(学生A)
- (7) 専門家の演技を大きい動きから小さい動きまで真似することで、インスピレーションを掴めるのですが、自分自身きちんと考えなければなりません。(学生A)
- (8) 体の傾きの変化でキャラチェンジすること、また声の大きさを調整し、違う人の話をみんなに伝える事です。(学生B)
- (9) 練習の中で注意した点は、小さな動作で自分の意図を表すことです。例えばキャラが後ろを向く動作を表したいときに、頭をちょっと後ろに向き変ったらよく、普段のように完全に振り向く必要がないのです。(学生B)

(6)～(9)から、中国語での落語の伝え方、ノンバーバルコミュニケーション(声・表情・動

き)<sup>11)</sup>の表現による伝達手段を再認識するという効果がみられた。

- (10) お客様の前で演出することになりまして、それもかなりのプレッシャーになりますが、それをどうやって乗り越えて、上手く演出するかということもいい課題になります。(学生A)
- (11) すごくいい思い出になりました。(学生A)
- (12) 最初に練習をする時は、セリフも人物の演じ分けもよくできなかった。落語を話している途中によく次に来るセリフを忘れて、またキャラをよく演じ分けられなかったです。先生とほかの二人といっばい練習したらだんだん良くなりました。(学生B)
- (13) それが私たち演者に伝わり、それをみんなに伝えるという影響力があります。(学生C)

(10)～(13)から、中国語落語の活動を通し、楽しさや達成感、責任感を得るという効果がみられた。

- (14) セリフの「俺は前からそういう話と塩辛が苦手」で塩辛の意味やこのネタもわかりました。(学生B)
- (15) セリフを決める前に先生と一緒に皿屋敷の日本語のビデオを見ました。ビデオを見るとことは私にとって通訳・翻訳能力の練習で、落語の聴解みたいです。(学生B)
- (16) 日常使用する日本語の叙述能力が向上しました。(学生C)

(14)～(16)から、日本語の語彙や会話能力、聴解、通訳・翻訳の学習につながるという効果がみられた。

### 3.2 アンケートの結果から見た「中国語落語」の観客への効果

「中国語落語の会」終了後に行ったアンケートの結果から、演者である学生と、観客である中国語圏の学生・日本人学生の間で働く対人的交互作用によるどのような効果があったかを考察する。

アンケートの対象は、「中国語落語の会」に観客として参加した20～28歳の中国語圏の学生10名と日本人学生8名。本発表では、「中国語落語の会」の学生への効果を中心に調査する

---

11) ジェスチャーや態度、表情など言語以外要素によるやり取り。

ため、教職員を含む社会人の観客を対象に入れなかった。

「中国語落語の会」終了後にアンケートを行い、無記名、質問項目はすべて選択式(項目1・2・5は択一、3・4は複数選択可)である。1時間半の会の後に行うアンケートだったため、参加者に配慮し、少ない質問項目で、記述式項目も入れなかった。資料5はアンケートの結果である。

<資料5> 「中国語落語の会」終了後のアンケート項目とその結果

質問項目(中…中国語圏の学生, 日…日本人学生)
項目1. 中国語落語は面白かったですか?/“汉语落语”有没有意思? ① 面白かった/有意思(中…100%、日…100%) ② 面白くなかった/没有意思 ③ わからない/不知道
項目2. “中国語落語”の内容が理解できましたか?/“汉语落语”的内容懂不懂? ① 理解できた/懂了(中…100%、日…88%) ② 理解できたところと、できないところがあった/有懂的地方, 也有不懂的地方(日…13%) ③ 理解できなかった/不懂了 ④ わからない/不知道
項目3. 「中国語落語」に参加した後、興味を持ったのは次のうち、どれですか?/参加“汉语落语”后, 选一下变有兴趣的?(複数回答可) ① 落語 (中…70%、日…75%)      ② 漫才 (中…60%、日…63%) ③ 中国語 (日…63%)                      ④ 日本語(中…30%) ⑤ 国際交流(中…40%、日…50%)      ⑥ 特にない 没有
項目4. 「中国語落語の会」にまた参加してみたいですか?/下次再有汉语落语会, 想参加吗?(複数回答可) ① 参加したい 想参加(中…90%、日…88%) ② 参加したくない 不想参加 ③ 演じてみたい 想演(中…20%) ④ わからない 不知道(中…10%、日…13%)

項目1と項目2の回答結果から、(日本人学生1名を除く)すべての学生が「落語は面白く、また理解できた」と感じていることがわかる。項目3の回答結果から、7割以上の学生が落語に興味を持ち、また、6割以上の日本人学生が中国語に興味を持ったことがわかる。「国際交流に興味を持った」と回答した学生も約半数いた。項目4の回答結果から、約9割の学生が「中国語落語の会」にまた参加したいと考えていることがわかった。「演じてみたい」と考えている中国語圏の学生も2割いた。

以上の回答結果から、「中国語落語の会」の演者である学生が母語を使用して落語を披露することで、それを観た学生達が落語を楽しみながら理解し、学習意欲や関心が増すという効果があるといえる。

## 4. 結び

本稿では、「中国語落語の会」という活動を例に、演者である中国語圏の学生へのインタビューと観客である中国語圏の学生・日本人学生へのアンケートの結果を考察し、日本語学習者が母語で落語に触れるという日本語教育の活動にどのような効果があるのかを述べた。

第一に、演者である中国語圏の学生は、母語を介した落語を約半年間練習し、落語の発表を経験することにより、

- a. 異文化への驚きや自国との違いに気づき、文化・歴史への理解が深まる
- b. 中国語による伝え方、ノンバーバルコミュニケーション(声・表情・動き)の表現による伝達手段の再認識
- c. 楽しさや達成感、責任感
- d. 日本語の語彙、会話能力、聴解、通訳・翻訳の学習に結びつく

以上の効果がみられた。

第二に、演者である中国語圏の学生と、観客である中国語圏の学生・日本人学生の間で働く対人的交互作用により、観客である学生(演者と同じ母国語の学生や日本人学生)は、

- e. 落語の楽しみを理解する
- f. 学習意欲の向上
- g. 外国語や落語への関心

以上の効果がみられた。

また、「中国語落語の会」は、指導者以外の教職員、院生、学外の国際交流団体職員など、多くの方々の協力を得て、実現したことを付け加えておく。桂(2015)は、教育機関では原則として担当する期間でしか指導できないことに触れ、「長いスパンで見ることのできない教育機関での落語演習には限界がある」と述べているが、今回の活動のように、学内外の関係者が協力し合い、限界を突破しようとし、新しいことに挑戦することが大事であるということを示せたのではないかと。

## 謝辞

授業やアルバイトなど、忙しい留学生活の傍ら、演者として約半年間、共に活動してくれた学生達に深く感謝申し上げます。「中国語落語の会」での経験が、皆さんの今後の人生の中で、いつか役に立つことを願い、また、ご活躍、成功をお祈りします。本当にありがとうございました!

## 【参考文献】

- 大河原清(1988)「教師の身体動作比較のための落語家の身体動作分析—話者内交互作用と対人的交互作用(笑い)—」『岩手大学教育学部附属教育工学研究』第10号、p.152、pp.121-129
- 江里川春雄(2012)『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店
- 桂花團治(2015)『教育に生きる落語の世界』『大阪青山大学紀要』第8巻、p.63、pp.137-143
- 桂文我(2007)『楽しく演じる落語 教室でちよいと一席』いかだ社
- 木俣由美(2001)「笑い」と大学教育—漫才や落語で楽しく学ぶ—」『日本笑い学会笑い学研究』第8巻、p.7、pp.121-126
- 酒井たか子(2001)「中上級日本語学習者が落語を通して学べるもの」『筑波大学留学センター日本語教育方法研究会誌』第8巻 第2号、p.15、pp.134-173
- 須田剛(2017)『マンガで教養 やさしい落語』朝日新聞出版
- 森真由実(2012)「落語」を教材とした日本語授業の試み—落語スクリプトに出現する文型・文法の分析—」『金城学院大学論集人文科学編』第9巻 第1号、p.158、pp.112-123
- 森真由実(2014)「落語の笑いをめぐる日本語学習者の反応」『金城学院大学論集人文科学編』第11巻第1号、p.231、pp.143-146
- 森真由実(2017)「非言語的および非言語的側面に焦点をあてた「落語で学ぶ」コース・デザインの実践—中級日本語学習者を対象とした活動—」『金城学院大学論集人文科学編』第13巻 第2号、p.228、pp.149-161
- 室岡ヨシミコ(2016)『アマチュア落語に挑戦する本!独学なのに3ヶ月で1席できます』言視舎

---

논문투고일 : 2018년 04월 03일  
심사개시일 : 2018년 04월 18일  
1차 수정일 : 2018년 05월 15일  
2차 수정일 : 2018년 05월 17일  
게재확정일 : 2018년 05월 17일

---

---

**<要旨>**


---

**日本語学習者の母語を取り入れた落語の活動報告**

- 「中国語落語の会」でみんな笑っちゃいな -

**福重一成**

日本の伝統芸能である落語を日本語教育の言語学習的、または文化的側面から論じた研究や実践報告は多く見られるが、日本語学習者に母語を介して落語に触れさせ、その効果を挙げている研究や実践活動に関する報告はまだ見られない。

筆者は、日本語課外教室の活動として2018年1月に行った「中国語落語の会」に参加した演者である中国語圏の学生へのインタビューと、観客である中国語圏の学生・日本人学生を対象としたアンケート調査を行った。本稿ではインタビューとアンケートの結果を踏まえ、「中国語落語の会」の効果を考察した。

第一に、演者である学生には、

- a. 異文化への驚きや自国との違いに気づき、文化・歴史への理解が深まる
- b. 中国語による伝え方、ノンバーバルコミュニケーション(声・表情・動き)の表現による伝達手段の再認識
- c. 落語の会に参加する楽しさ、台本作成や練習、本番での達成感、母語で落語を演じる責任感
- d. 日本語の語彙、会話能力、聴解、通訳・翻訳の学習に結びつく

以上の効果がみられた。

第二に、観客である学生には、

- e. 落語の楽しみを理解する
- f. 学習意欲の向上
- g. 外国語や落語への関心

以上の効果がみられた。

**An Investigative Report on Rakugo in the JFL(Japanese as a Foreign Language)  
Learner's native language**

- Through a rakugo performance in Chinese -

***Fukashige, Kazuuri***

There are many studies about Improving the effect of the rakugo for Language Learning or culture understanding. However, the study about the effect of the rakugo in the JFL(Japanese as a Foreign Language) Learner's native language has not been discussed.

In January, 2018, I did a rakugo performance in Chinese as an activity in the Japanese extracurricular class. Then I interviewed the performers who is the students in Chinese area, and I conducted a questionnaire survey for the Chinese students and the Japanese students in audiences. In this paper, I considered the results of the interview and the questionnaire, and I will report the effects by the "rakugo performance in Chinese".

Concretely, the "rakugo performance in Chinese" has two effects.

On the one hand, The effect on the performers is

- a. Being Surprise to a different culture and noticing the difference with their own country, the performers understood Japanese culture and history more.
- b. The performers knew how to tell rakugo in Chinese, The vehicle of Non-verbal communication (Voice, expression and movement) was re-recognized by them.
- c. They knew the pleasure about participating in rakugo. They got the feeling of achievement by the script making, the practice and the performance. They felt the sense of responsibility which performs a rakugo by a mother tongue.
- d. This experience was related to Japanese vocabulary, conversation ability, listening and learning of interpretation and translation for them.

On the other hand, the effect on the audiences is

- e. They understood the pleasure of rakugo.
- f. Their desire to learn is improved.
- g. The interest to the rakugo and foreign language is increased.